

四畳半から始まる幻想。

茶屋休石

物語の始まり

4畳半の畳の部屋。布団を敷いて、ちゃぶ台を置けばそれ以外のことは何もできない。トイレ共同、風呂なし。俺はこんな貧乏感漂う部屋に住んでいる。典型的、金のない苦学生である。もうすぐ寿命が来るであろう安物蛍光灯の光の元、レポートが指定枚数に達しようとしていた。

「終わったー！」

両手を広げ仰向けになる。目の前には強すぎる光を放つ蛍光灯。

目を瞬くと、光輪が浮かぶ。

今日の目標の分まで予定通り終わることができた。今日は久々に日付が変わる前に寝ることができそうだ。

「違う。終わりなんかじゃない。これは、始まりなのよ」

俺しかいないはずの部屋に突然俺以外の声が響いた。

勉強机代わりにのちゃぶ台の対極に女が一人。

背筋をぴんと伸ばし、正座していた。

「あ、え、あのどちらさまですか？」

「そうよ。これから始まるのよ。終わりは常にスタートなのよ」

「え、ちょっ、どっから入ってきたんですか？何時の間に？」

「だから、まだ終わってなんかいないの。あなたの物語は」

話が通じない。その女も日本語で話しているのだから日本語が通じないというわけではないはずなのに。

というか、同じものを見ている気がしない。

「あの、警察呼びますよ」

「そんな事をしてる暇はないの！さあ、行きましょう！」

どっかの精神病院から逃げ出してきたのかなあ？この近くにそんなモンあったか？

「え、いや、どこに？」

「私たちの未来へ！」

え、何？SF？ファンタジー？いや、いつのまにか話し通じてるし。

「さあ！」

彼女は立ち上がり、俺に手を差し伸べてくる。

突然のことに呆然として、思わずその手をとってしまった。

これが彼女との出会い、そして、これが悪夢の始まり。

俺はこの後とんでもない大事件に巻き込まれるのだが、その話はまた後日。